

河川管理者よ！住民だって泣いている

尼崎市 細川 ゆう子

淀川水系流域委員会を2月から休止すると言う。大変落胆させられた。はっきり言って、言葉では言いつくせない思いだ。だがそれは、私よりもっとやりきれない思いの方が他にたくさんおられると思うので、あえて言わない。なぜなのか。いろいろと聞くけれど、つまり淀川の河川整備について河川局での基本方針の審議が滞り(わざと進めていないの?)、近畿地方整備局が河川整備計画案を流域委員会に示すことができないので、流域委員会はそのあいだ休んでもらうのだそうだ。休むんなら、休んだときの委員に続けて審議してもらわないと困ったことになるでしょう? 原案が出たのに、そのとき今までとは違う人がまったく違う意見を言ったら、混乱するでしょう。それとも、違う意見を言われるのを予測して、その方々にあわせた原案を作るようにするのかな? 器用なものですねぇ。

これは、現淀川水系流域委員会の実質上の解散ということだけではない。河川法改正以来、河川管理者が目指してきた「新たな河川整備計画づくり」が、長良川河口堰以前の、住民と河川管理者が対立し河川整備が行き詰ってしまう、不幸な時代に逆行してしまうことになる。それを河川管理者が選択すると宣言したも同然なのだ。この状況に一番とまどい悲しんでいるのは、他ならぬ現場の河川管理者だろう。淀川では、流域委員会が始まってからずっと河川管理者と議論しあい、河川管理者は、より緊急性の高いもの、できることは、実際に調査検討・実施までやってきてくれた。

9月25日読売新聞日刊の「堤防強化」についての記事によれば、浸透の安全基準を満たしていない堤防の調査は対象区間10,204kmのうち、平均で6割弱しか進んでいない。江戸川でも80%なのに、淀川水系の川は100%だ。「さすが淀川水系の河川管理者はすごい」と我がことのように誇らしかった。実際そのおかげで、私の住む地域はデルタ地帯で一か所でも破堤すれば大災害になるところだが、一番破堤の危険のある箇所は去年度すでに堤防強化を実施してもらえた。地域の人たちはとても喜んでいる。絶滅危惧種の保護対策や外来種対策も、最優先で進めてくれている。琵琶湖の固有種を守るために、住民とともに河川管理者が休みを返上して、稚魚が琵琶湖に戻れるように水路を手掘りで掘ってくれた。淀川のワンドも、つくったものが機能するように試行錯誤をくり返してくれている。猪名川では、対話討論会がきっかけで「猪名川クリーン作戦」の実行委員会が立ち上げられ、住民といっしょに多くの河川管理者が、猪名川の清掃に参加してくれた。河川整備計画などできていなくても、河川管理者はせいっぱいできることに取り組んでくれたし、住民はむしろその方が助かっている。河川管理者だって大変だっただろうけれど、住民と対立するより、住民に喜んでもらえる実感がある方が、やりがいもあったんじゃないかな。少なくとも、私は楽しかった。流域委員も河川管理者も庶務さんも傍聴者もみんなでいっしょに「新たな川づくり」の夢を共有できて。

河川整備計画ができないと川づくりが動かないと思い込んでいるのは、現場を知らない人たちにちがいない。淀川水系の河川管理者は、流域委員会に責められるからではなく自らの意思で仕事をしてきた。流域委員会の意見を聞き、住民の声に耳をかたむけ、現場の判断で川づくりに取り組んできたのだ。それが、住民にとってもありがたかった。今多くの住民が、川づくりが変わることを期待して、それぞれに川に関わる活動を始めている。河川整備計画ができていないことなど、気にする人はいない。自分たちがいっしょうけんめいに働かないでいて「現場が先行するのは困るから、止めてしまえ」というのは、なんとも情けない。自分がそこまで働きたくないなら、せめて現場の判断を信用すべきなんじゃないか。

部下を信じられない上司なんて、悲しいじゃないか。不況の中、倒産の危機から立ち直った企業は、社員一人ひとりの能力を引き出すことに成功している。トップダウンでしか動けない企業は生き残れない時代だ。上司が部下を信用せず、あくまでトップダウンで事を進めようとする組織なんて、滅びるしかないじゃないか。国土交通省河川局だけは、変わってくれと信じてきたのに。本当に悲しい。

このまま流域委員会を休止して、流域委員の意見を聞かず、住民の声にも耳をかたむけず、現場の判断も信じずに河川整備計画を策定するのなら、河川一つ一つの実情にあった、その川を愛する住民の納得のいく計画になるはずがない。河川管理者が、長良川河口堰以前のトップダウンの整備計画作りのやり方に戻すのなら、住民も覚悟して受けて立つしかない。愛する川のために、愛する地域のために。納得できる計画に変えてもらえるように住民運動で対抗するしかない。

河川管理者の多くは、住民運動をする人間につらい思いをさせられてきただろう。けれども、住民の目だってふし穴じゃない。今日の前にいる河川管理者が立場上そこにいるだけで、本当に対立した考えを持っている人間は別にいることなど、百も承知だ。その人たちが姿を見せてくれないから、しかたなしに仮の敵としているに過ぎない。責めながら、相手も仕事で気の毒だと思っている。だけど、こちらだって成果が上がるとは限らない反対運動のために多くの住民を巻き込んでいる。協力してくれる人々たちを失望させるわけにはいかない。誰よりも声高に、河川管理者を親の仇のように責めなければ、人はついてきてくれない。心の中で、気の毒に思うことしかできない。責められる河川管理者もたまらないだろうが、住民だって、悲しみを秘めて戦ってきたのだ。淀川水系流域委員会ができて「これからは新しい形で河川整備計画に関わることができる。河川管理者を責めずにすむ」と、住民運動で戦ってきた多くのひとたちが期待を持ったことだろう。今、全国でその人たちが泣いている。痛みを感じずに、人を責める人間などいない。

(なんだか、流域委員会向けの意見じゃなくなっていました。すいません)

今本委員長の「堤防強化を急ぐべき」との提言は、たびたび水害に見舞われた歴史を持つのに堤防が高くなって水害の記憶が遠ざかり、結果町に人が住みすぎて、実は砂だらけのもろい堤防が洪水から地域を守る唯一の砦である地域の住民にとって、待ち望んだ治水論だった。去る8月22日、記録的な集中豪雨により、私の地域は、かねてから心配したとおり、内水によって床上を含む浸水被害が起きた。これに堤防の破堤が加われば、輪中堤の中は壊滅的な被害になる。しかも、他より低く真っ先に越水するのに、高くすることも厚くすることも不可能な場所がある。流域委員会休止といっしょに、対越水堤防も立ち消えになるのではないかと心配で仕方がない。流域委員会で学ばせてもらったからこそ、私は地域を見直し、愛する地域のためにやらねばならないことに出会った。教えてくださった委員の先生方、河川管理者の皆さん、先輩の住民運動家の方たちに感謝している。しかし河川整備計画がいつできるにしても、納得のいくものにならないと予測できるなら、今から準備を始めるしかない。今までいっしょに「新たな川づくり」をめざしてくださった皆さん、ありがとう。私は「ハイブリッド堤防」をめざして住民運動を始めます。どうか、心の内はお察しください。(泣いてるよ)

今、地域の方に自分の考えをぶつけてみようかと集会を計画している。今本先生に基調講演をしていただく予定だ。河川管理者の中にさえ誤解している人が多いけど、今本先生の考えは決して「脱ダム」ではない。防災研究所の所長として災害現場に何度も立ち会って「何とかこの悲しみを止めたい。破堤の輪廻を止めたい」とやむにやまれぬ思いから今の「真の治水論」に行きついたに過ぎない。それを住民に伝え、地域を見直すきっかけにしまらうつもりだ。次の委員会までには案内を準備します。ダムを離れた今本先生の治水論を聞きたい方、阪急園田にお気軽にいらしてください。